

天高く馬肥ゆる秋ということわざがあるが、肥えるのは馬ばかりではない。増え募るわが存在の重さのことはさておき、雨上がりの道端などには、雨後の竹の子ならぬ各種のキノコが、一夜にしてよぎによぎと出現する。巨大なものから小粒ながら群生するものまで、じつに多彩だ(図-1)。勇んで臨むキノコ狩りではなかなか見つからないものなのに、この季節の道端ではやたらに目につくから皮肉である。

大学時代、興味本位から菌類学の授業を受けたことを思い出す。そのおかげか、子実体とか木材腐朽菌といった用語だけは今でも口を突いて出る。われわれは一般にキノコと呼んでいるが、キノコとは菌類の胞子を散布するための繁殖器官であり、子実体はその正式名称なのである。キノコが生えている林床の湿った落ち葉の層をめくれば、白っぽい菌糸のネットワークが確認できることだろう。菌類の実体はそちらの方で、いわゆるキノコはかりそめの姿ということになる。ちなみにその語源は「木の子」だと言われている。朽ちかけた木に生えるものが多いからと察せられる。

キノコというと、美味か毒かという関心しか湧かないのが普通である。ところが同じキノコでも場所によっては弱毒で食用可能だったりすることもあるらしい。たとえば毒キノコ

の代名詞ともいうべきベニテングタケ。美しいバラにはとげがあり、美しいキノコには毒があると言いたくなるキノコだ。ところが長野県の菅平あたり、大河ドラマで話題の真田の里周辺では、ゆでて塩漬けにしたものを食す習慣があると聞いた(図-2)。特に、そばつゆのダシにするとおいしいのだとか(ただし、あくまでも事情に通じた地元民の話なので、軽々に真似はしない方がよい)。個人的には地元の方にベニテングタケ蕎麦を食す会の企画を提案しているのだが、いまだ実現していない。

まあ、猛毒のフグだって食べる国柄なので、毒キノコを食べる知恵を見つけても不思議ではない。たとえば石川県では、古くからフグの卵巣(!)をぬか漬けにして食べる習慣が伝えられている。いったい誰が最初に試したのか。

このほど、それとは別の驚きにくわした。なんと、肉食のキノコが存在するというのだ。虫に寄生する冬虫夏草の類の話ではない。スーパーでふつうに売られているヒラタケが、じつは肉食性でもあるという話だ。いや、ヒラタケが動物を襲って食べるというわけではない。菌糸にからまった線虫などを殺して消化するらしいのだ。この手の菌類は、線虫食菌類と呼ばれ、意外に多いようだ。なかには菌糸を投げ縄状に



図1 道端に生えたキノコ(東北大学キャンパスにて)



図2 ベニテングタケとおぼしきキノコ(筑波大学菅平高原実験センターにて撮影)

して、それで線虫をからめ捕るツワモノもいるとか。

最近の研究で、ヒラタケが線虫を殺す仕組みが明らかになった。ヒラタケに含まれるタンパク質（ヒラタケの学名 *Pleurotus ostreatus* から *pleurotolysin* と *ostreolysin* と命名されている）が、獲物の細胞にパンチング状の孔を開けてしまうのだ（そこでこのタンパク質は孔形成タンパク質とも呼ばれている）。

ヒラタケは、広葉樹などの朽木に生える木材腐朽菌である。それも、木質部のセルロースよりもリグニンを優先的に分解することからリグニン分解菌類と呼ばれている。線虫食は、栄養分の不足を補う意味があるとされている。

ところで、図-3を描いた画家の名を見て「あれっ」と思ったむきもあることだろう。そう、いまだに名作の誉れ高く、多くの人に愛されているピーターラビットの作者ビアトリクス・ポター（1866～1943）その人である。

ポターはロンドンの高級住宅街ケンジントンで裕福な家庭に生まれた。幼いころから絵が得意だったようで、12歳のときに絵の家庭教師があてがわれた。一家は、スコットランドの湖水地方で夏を過ごすことも多く、少女は植物や化石などの水彩画を好んで描いた。15歳のとき、近所に大英自然史博物館がオープン。少女はスケッチブックを手に展示室に通い詰めた。そして20歳の頃、森の妖精キノコに魅せられた。顕微鏡でキノコを観察するうちに、スケッチだけでは飽き足りず、実験にも手を染めるまでになった。そして当時はまだ謎の多かった胞子の発芽に関する新発見を成し遂げた。その成果は論文にまとめてロンドンのリンネ学会に提出したのだが、嘆かわしい障壁に阻まれることになった。1897年に会合で代読されたものの、印刷に付されることはなかったのだ。当時はまだ、趣味としての博物学は女性にも普及していたが、学問の世界は女人禁制の時代だったのである。



図-3 ポターが描いたテングタケの1種

それでもポターは、アカデミズムとは一線を画しつつも菌類や地衣類の研究をつづけた。そのほか、ご承知のように動物絵本の名作を世に送り出した。そして晩年は湖水地方の景観保全に尽力し、全遺産をナショナルトラストに託した。

菌類の研究といえば、本邦の南方熊楠（1867～1941）の名も思い起こされる。アメリカ漫遊の果てにロンドンの大英博物館の図書館で独学し、創刊間もない『ネイチャー』誌に文化人類学分野の論文を寄稿した碩学である。帰国後は故郷の和歌山県田辺に居を構え、粘菌類を中心とした研究に勤しんだ。粘菌類は、かつては菌類に分類されていたが、現在は原生生物に配属され、菌類からは外されている。とはいえ、これもまた魅力的な森の妖精である。ポターと熊楠の奇しき因縁はそれに留まらない。熊楠も、鎮守の森や田辺湾に浮かぶ神島の自然保護を訴えたのだ。二人とも、森の妖精の声を聴き取ったにちがいない。